特集
災害と図書館

ミャンマー
―サイクロン被災と図書館―

小林 磨理恵

●はじめに

巨大なサイクロン「ナルギス」は、二〇〇八年五月二～三日にかけてミャンマーを直撃した。暴風と豪雨はエーヤーワディ・デルタとヤンゴンを襲い、死者・行方不明者は一四万人にも上ったという。八〇万戸が倒壊または半倒壊し、二五〇万～三〇〇万の人々が住みかを追われた。被災直後に軍事政権が、国際社会、とりわけ欧米諸国の支援を制限したことも、未曾有の状況を深刻化させる一因となったとみられている。

ナルギスの猛威は一〇〇〇を超える図書館にも被害をもたらした。多くの人命が危険にさらされるなかで、図書館の被災に対し、ミャンマーの現地の人々はどのような行動をとったのだろうか。

サイクロン被災を機に発足したNPO「ナルギス・ライブラリー・リカバリー」は、サイクロンの猛威によって失われた図書を提供するための活動を継続的に行っている。サイクロン被災からおよそ五年を経過した二〇一三年二月現在もその活動は継続している。そればかりか、サイクロンの被災地ではない地域にも活動を展開しているという。この活動は、当初よりミャンマーにおける教育の普及には図書館が必要不可欠であると強く意識されたものだった。活動の射程を被災図書館の復旧にとどめないわけは、図書の提供を通じて教育の普及に貢献することに活動の目的があるためだろう。

NLRのタント・トー・カウン氏（石井美千子氏撮影）

本稿ではNPO「ナルギス・ライブラリー・リカバリー」の活動の展開を紹介する。なお、本稿は、同団体のウェブサイトに配信される活動記録をベースに、同団体の中心人物、タント・トー・カウン氏への聞き取り調査によって補足したものである(1)。

●ナルギス・ライブラリー・リカバリーの発足

「新しいプロジェクトを提案したい。」

サイクロン被災から約三カ月を経た二〇〇八年八月一七日、ミャンマー・ブック・センターの経営者であるタント・トー・カウン氏は、アメリカのミャンマー専門家で元コーネル大学教授・キュレーターのジョン・バッジリー氏にEメールで呼びかけた。Eメールは次のように続く。「もしあなたが関心を持ってくださり、あなたのドナーも協力的であれば、図書を購入して、ミャンマーに送ってほしいのです。あまりコストがかからない船便を用意します。ドナーがナルギスからの復興に向けた長期のプロジェクトに力を貸してくれるのならば、物資でもお金でも寄付してください。私は、これがミャンマーに教育を普及させるための方策にもなると考えています。一握りの学生しか私立学校には行けません。奨学金を受け取るのはほんのわずかな学生だけです。大部分の学生は、公立学校に通い、たくさんの良質な本を欲し

NLRから図書を受け取る子どもたち（http://www.nargislibrary.org/2010/05/children-with-books-from-nlr/：2013/1/21最終閲覧）

ティンガンゴン図書館の外観（https://picasaweb.google.com/ahwin2006/NLRTripMyanmar2010?feat=email#：2013/1/21最終閲覧）

ている。このことを忘れないでほしいのです。」

このように、タント氏は図書の寄付を呼びかけるとともに、それが教育の発展に寄与することをミャンマーから訴えた。タント氏がこのメッセージを発した時期には、NGOや国際的な援助団体が被災地の復興支援プロジェクトに着手していた。しかし、図書館の復旧は未だ取り残された状況にあった。倒壊した図書館の再建と、失われた図書の提供は、図書の専門家であるタント氏にはとりわけ急務に感じられたことだろう。

タント氏の提案を受けて、バッジリー氏と、タント氏の父親であり、ヤンゴン大学図書館情報学部名誉教授のウー・トー・カウン氏が構想を打ちたて、サイクロンの被災地に図書館と図書を届けるためのNPOが結成された。それが、「ナルギス・ライブラリー・リカバリー」（以下NLR）である。

早速、同二〇〇八年一一月には、ワシントン大学図書館と、新刊書と中古本を販売するアメリカの書店「ハーフ・プライス・ブックス」によって、八〇〇〇冊の英語の図書がアメリカからミャンマーに向けて船便で発送された。これが最初の図書の寄贈便である。八〇〇〇冊の図書は、翌年一月に、タント氏らによって最も図書を必要としていた六〇の図書館に分配されたという。

●活動の経過

現在まで続く活動の内容は、寄贈図書の分配、図書館の再建、ワークショップの開催に大別される。

①図書館の再建

サイクロンにより倒壊した図書館の再建が目指され、二〇一〇年一二月にティンガンゴン・コミュニティ図書館が開館した。

ティンガンゴンはエーヤーワディ・デルタに位置し、ナルギスサイクロンの被害に遭った村である。被災以前に存在した二つの小さな図書館は、サイクロン直撃により破壊されてしまった。新しく完成した図書館は、数度のサイクロンにも耐えうるよう設計された。また、十分な光や風を取り入れるために三つの窓が設けられ、夜一〇時まで開館できるように電気も取り付けられた。

この図書館の建設には、高校教師、市議会議員、医師、ビジネスマン等から成る図書館協会など、地元のコミュニティも尽力した。NLRは、図書の寄贈、初年の司書の給料の四分の三の負担、複数の雑誌の購読料負担、二～三名の司書やボランティアの教育を支援することに同意している。一方で、地元のコミュニティは、書架の設置や建物のメンテナンス、司書の選出と監督、二年目以降の司書の給料の支給を要請された。

サイクロン被災を機に建設されたこの図書館は、コミュニティセンターとしての機能をも果たしており、地方図書館の良いモデルとなることを目指しているという。近隣の村からも利用者が訪れ、人々の集いの場となっている。

②図書の分配

倒壊した図書館の再建に着手する以前、NPO結成の当初からNLRが最も力を入れ、継続的に行ってきた活動は、寄贈図書の受け入れとその分配であった。

サイクロンに見舞われた二〇〇八年末にはすでに八〇〇〇冊の寄贈があったことは先述の通りだが、それに続き、二〇〇九年二月には中古本を扱うアメリカの書店「スリフト・ブックス」から一〇〇万冊もの図書が寄贈された。寄贈された図書は総額三〇〇万ドルの価値を持つという。スリフト・ブックスの最高経営責任者は、「創造的な方法でミャンマー人とアメリカ人は図書館復旧に向けて前進していくのです。図書館は知を基盤とする社会において不可欠な存在ですから。」と言葉を寄せた。さらに、海運会社「アメリカン・プレジデント・ラインズ」は、寄贈図書がシアトルからミャンマーのコミュニティの図書館まで効率的に運ばれるよう支援することを表明した。

寄贈図書を種類別に分け、適切な送り先を決定する仕分け作業は、タント氏を中心に、約一〇〇名のスタッフ、ボランティア、ミャンマー図書館協会メンバーらが、引退した司書の助言を受けながら行った。大量の寄贈図書を仕分ける作業は多くの人手を要し、困難

を極めたという。

また、チャリティフェアにて寄贈図書の一部を、「ブック・ビュッフェ」と称して小さいセットは一万チャット、大きいセットは二万チャットという比較的安価で販売した。アメリカからの寄贈図書については、その三〇％を販売する許可を事前に得ていたという。その収益で子ども向けのミャンマー語図書や参考図書、文具を購入するための方策である。二〇〇九年四月には九〇〇〇冊のミャンマー語の教科書、一〇〇〇冊の英語で書かれた子ども向け図書がデルタ地域の図書館に分配され、二七〇〇名の学生に三冊ずつノートが贈られることとなった。

同年には、一年間で四回に分けて計一一二万冊がアメリカのスリフト・ブックスから寄贈され、NLRが図書の分配を通じて支援した図書館は一五〇にも上った。こうした活動は継続的に行われており、二〇一一年度（二〇一〇年九月～二〇一一年八月）には二六一もの図書館がNLRから図書を受け取っている。また、翌二〇一二年度には、約一四万冊の英語図書、約一万冊のミャンマー語図書が、八四の図書館に分配された。

こうして「失われた図書を提供する」というNLRの最大の活動は継続的に行われている。寄贈図書を単に分配するのみならず、それらを販売して得た収益で図書館や学校現場の必需品を新たに購入するという工夫によって、寄贈図書は、最も適切な人と場所に届けられ、最大限活かされているといえるだろう。

③ワークショップの開催

新たな試みとしては司書らを対象にしたワークショップの開催がある。二〇一一年一二月～翌年一月に、オーストラリアから訪れた夫妻を講師として、一七五名の教師や司書、行政官、修行僧を対象にした「図書館の読者のためのワークショップ」をヤンゴンなど三都市において開催した。出席者は、読書の初心者が英語に馴染むための方法について学んだ。海外から講師を招いて司書らを教育することは、今後重点を置かれる活動のひとつであるという。

●おわりに

NLRの活動は、当初はサイクロン被災地の図書館復旧から着手されたが、現在は被災地ではない地方も含めてワークショップの開催など新たな取り組みを模索しながら全国的に拡大している。この活動の展開は、NLRの生みの親でもあるタント氏が「教育の普及」を図書館の役割と認めていることからも納得できるものだろう。ミャンマーの図書館は、被災前の状態への「復旧」にとどまらない、さらなる発展へと展開をみせている。

（こばやし　まりえ／アジア経済研究所　図書館資料企画課）

《注》

(1) アジ研図書館石井美千子氏により二〇一三年一月実施。

《参考文献》

①Ashley South, Susanne Kempel, Malin Perhult, and Nils Carstensen, 2010. “Myanmar-Surviving the Storm: Self-protection and Survival in the Delta,” Local to Global Protection.

②岡本郁子［二〇〇九］「ミャンマー・サイクロン被災（二〇〇八年）：政治化された災害と復興支援」『アジ研ワールド・トレンド』一五巻六号。

③Nargis Library Recovery (http://www.nargislibrary.org/：2013/1/21最終閲覧).